

2月10日

国 語

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 問題は□から□です。確認後、問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3. 試験中は試験監督の指示に従うこと。
4. 問題冊子の余白は自由に書き込んで構わない。ただし、答えは解答用紙に記入すること。
5. 「、」「。」は一字とする。

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

一 漢字に関する次の問に答えなさい。

問一 次の1～5の傍線部の漢字の読みがなを答えなさい。

- 1 首相を擁立する。
- 2 彼女の失言に憤慨した。
- 3 環境破壊に警鐘を鳴らす。
- 4 自然の摂理にかなう。
- 5 仕事が滞る。

問二 次の1～5の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 ゲンソウ的な風景に感動する。
- 2 屋根のトソウがはげている。
- 3 彼はユウグウされている。
- 4 イベントをモヨオす。
- 5 キヨム感が漂っている。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

おそらく人間が **X** 性（もしくは群居性）の動物であることに由来しているものだと思いますが、私たちは、自分と同じタイプの人間に **Y** 感を持ちます。私などは、自分と同じカバンを持っていた人がいると、それがどんな人なのだろうかとあれこれ詮索^{せんさく}したりします。年が同じであったり同じ出身地であったりすることには、とりたてて何の意味もないように思われますが、不思議なことに私たちはたったそれだけのことで「わかりあえるかもしれない」と感じたりもします。そして、共通している要素が好みや価値観や言動である場合に、その傾向はさらに強くなります。へア

最初に注意ですが、無理矢理に同調しても早晚ボロが出て、かえって反感をもたれることになります。ここで基本的スキルとして説明するのは、自分と相手の共通点（共通の好みや価値観や言動）を探し出すということです。演じるのでも偽装するのでもなく、本来の自分の中に^①それを見つけるので、ボロが出ることはありませんし、無理することも不要です。へイ

しかし、時間があれば、ゆっくりとそのような共通点を探すことが可能ですが、時間がない場合には難しいことになります。たとえば、就職の面接のときに同調行動をとるのは、時間的な制約から、簡単ではありません。そのような場合は、動作やしぐさや言葉のレベルでの同調を試みることができます。同じ動作を少しませたり、相手が使った単語を控えめに繰り返して使うなどの同調であっても、効果を持つ場合があります。

す。また、会話のリズムや速度を合わせるというタイプの同調行動が効果を発揮する場合もあります。へウ

印象管理とは、原則として「感情的な反感をもたれないようにする」「好感をもってもらうようにする」ためのスキルのことを言います。ただし、広く考えるならば「誠実」「理知的」「感情的」「弱気」「強気」「攻撃的」「防衛的」などを効果的に表現することも含まれます。へエ

好感を持たれるためにもっとも効果的なのは、自分の側が好感を持つことです。

A 単に相手を褒めたりしても、お世辞であるところさえられれば逆効果となりかねません。相手に好意や尊敬の念を伝えるためには、まずその人のよい点を見出してこういう姿勢をとることが必要です。その人と会話するときには、常に「勉強になる点」を探し出すということです。浮わついた賞賛の言葉よりも、そのような姿勢があなたの態度に表われているほうが、好感をもたれます。

「あの人には、尊敬できる点や、褒めるべき点など何もない」というのであれば、そもそもその人と良好な関係を維持する意味もないでしょう。その人に好感を持ってもらいたいと考えている以上、すくなくとも、何か評価すべき点があるはずで、まずそれを発見し、その人を好きになることが重要です。**B** 「好きになれない」のであれば、^②積極的な印象管理はあきらめ、^③「防衛的印象管理」に努めるのがよいでしょう。

また、「賞賛は遠くからしろ」と言われるように、直接的にその人に示すよりも、第三者を通して、あなたが「褒めている」ことが伝わった

ほうが、効果が高いことが知られています。その際、たとえば「○○さんは、少し無茶なところはありますが、熱い気持ちを持っているよ」というように、前段で少し批判し、後段で褒める、ということが効果的であるとされます。つまりそれは「しっかりと評価している」ことの表れであるのとらえられるからです。ただし、その第三者が悪意を持っている場合「○○さんのこと、無茶だつてさ」などというように後段を省略して伝えられることもあるので、注意が必要です。

印象管理での注意点としては、立場固定という問題があります。「好意を持たれている」ということは、何かのときに束縛となります。あなたは、その相手から「いい人」と思われているために、正面切って反対意見を述べることに躊躇ちゅうちよしてしまうなどということが、立場固定の問題点です。^④その点では、嫌われていることにも意義があるとさえ言えます。

返報性というのは、「プレゼントをもらうと、何か負担を感じて、お返しをしたくなる」という人間の心性に基づく感情的コミュニケーションの要素的テクニックです。相手を信じれば、相手はあなたのことを信じます。「相手を信じる」ということが大きなプレゼントであればあるほど、返報性は大きくなります。誰からも信用されていない人を信じれば、その人は、あなたに絶大な信頼を寄せることになります。逆に、「信頼」「信用」に困っていない人を信じて、返報性はあまり機能しない場合が多いでしょう。

この「プレゼント好き」の心性を利用して、自分の側が「借りを作る」ということも、きわめて効果的な感情的コミュニケーションのスキルとなります。これを、ここでは「逆返報性」と呼びます。逆返報性

とは、「プレゼントをもらうように仕向ける」ことによって、率先して「心理的な借りを作る」ことを言います。もちろん、プレゼントというのは、モノである必要はなく、「何かを手伝ってもらう」「何かを貸してもらう」「何らかの便宜を図ってもらう」ということでも同じです。たとえば、上司や同僚に頼みごとをし、「ありがとうございました。本当に助かりました。もしも○○さんがいなかったら、クビになってたかもしれない！」「などと過剰とも言えるほどのお礼をするというような例がこれに該当します。「おいおい、そんなにスゴいことしてないぞ！」と感じても、悪い気はしないものです。相手が「心理的に貸しを作った」と感じるのは、その二人の間にある種の関係が形成されたことと同じです。

単純に言うならば、「^⑤借りは返さなくてはならない」と「^⑥貸しは返してもらえるはず」という二つの感覚は、同様に機能するということです。自分との間で「貸し借り」の関係を持っている人は、自分にとって重要な位置を占めています。ただし、金銭の貸し借りは、また別の問題が発生するので避けたほうがよいでしょう。ここで言っているのは心理的な貸し借りです。

もしもあなたが、ある組織の中で関係を密にしたいと考えているなら、その組織内で「借り」と「貸し」をたくさん作るのが一番の近道です。「貸し」を作るのが難しい場合には、「借り」でいいのですから、いろいろな方法を考えることができるはずです。さらに言えば、心理的な貸し借りというのは、ちょっとした物質的な貸し借りによっても引き起こすことができます。「ちょっとそのペン貸して！」という具合です。そして、使ったらすぐに返し「ありがとう、助かった」とお礼を言うことが

大事です。たったこれくらいのことでも人間の感情は動きます。それは人間が、本来的に人と人との関係を基軸に生きる存在だからです。もちろん一番大事なのは、それによってあなた自身の感情も動くということです。

感情的コミュニケーションスキルとしても極めて重要なのが、このプロービングです。

プロービングには、二つの要素があります。一つは、どのような質問をするかであり、もう一つは、その質問への反応を判断することです。したがって、スキルとしては⑦「質問と応答の組み合わせ」をたくさん蓄積することが重要です。

少々古い例ですが、『刑事コロンボ』のプロービングは優れています。あらかた質問が終わり、帰り際のドアのところで振り返り「最後に一ついいですか」と切り出して質問するというスタイルです。いつも同じ形式であることがとても重要です。コロンボ刑事は、同じプロービングをしたときの様々な反応を（直観的に）データベース化していると考えられるので、いつも同じプロービングを行なうというわけです。プロービングの大事な点は、それを行なう側である自分の判断が正確である確率を知ることです。コロンボ刑事は、相手の反応パターンを解析していると考えerべきです。同様に「ウチのカミさんがね……」というのもプロービングの一種です。それによって、相手が自分をどう認識しているのかを判定できるからです。普通、刑事が「私の妻の話なんだけれど（『ウチのカミさんがね』）と言いだしたら、「くだらない話を始めたな」とか、「この刑事はボンクラだな」とか、いろいろなと考えるはずで

その反応から、やましいことを抱えている人を判定するスキルを習得することは不可能ではありません。それが、プロービングの技術です。

したがって、プロービングでは「キラーパス」のような質問の仕方や質問そのものを蓄積していくことが必要となりますが、まずは簡単なものから始めるのがよいでしょう。たとえば日常的な挨拶であっても、普通そうしているように「同じ形で」「同じセリフで」行なえば、プロービングの意味を持ちます。そのとき大事なものは、相手の反応をきちんと観察して記憶しておくことです。特に、表情や視線、声の抑揚などを観察しつづけます。また、「ねえねえ、ちょっと聞いていい？」「一つ聞いていいですか」などというような問い合わせ開始のプロービングも有効です。自分らしいやり方で、毎回統一して行なうことによって、相手の自分への評価や感情を知ることができるようになります。

（高田明典『コミュニケーションを学ぶ』より）

※刑事コロンボ…一九六八年からアメリカ合衆国で制作・放映されていたサスペンス・テレビ映画シリーズ。

問一 X・Y にあてはまる語を、次のア～クよりそれ

ぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 優越 イ 独自 ウ 対称 エ 親近
オ 義務 カ 使命 キ 社会 ク 多様

問二 A・B にあてはまる語を、次のア～オよりそれぞ

れ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ また ウ もしも
エ さらに オ たとえば

問三 次の脱落文が入る最も適当な箇所を文中のへア～へエ～

より選び、記号で答えなさい。

したがって、「わかりあえるかもしれない」と相手に感じ
てもらうためには、その相手の好みや価値観や言動と、自
分のそれらとが同じであることを表現するのが得策です。

問四 線①「それ」の内容として最も適当なものを、次のア～

オより選び、記号で答えなさい。

ア 「わかりあえるかもしれない」気持ち。
イ 基本的スキル。

ウ 自分と相手の共通点。

エ 同調行動。

オ 価値観や言動。

問五 線②「積極的な印象管理」、線③「防衛的印象管

理」の内容を説明した文を次のア～オよりそれぞれ選び、記号
で答えなさい。

ア 人と良好な関係を維持するための印象管理。

イ 相手に好感を持つてもらうための印象管理。

ウ 相手からお世辞ととらえられる印象管理。

エ 第三者を通して伝えるという印象管理。

オ 自分の好意や尊敬の念を伝えるという印象管理。

問六 ——— 線④「その点では、嫌われていることにも意義があると

さえ言えます」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 曖昧な態度でいられるよりも、はっきりと嫌われていることが分かった方が、気持ちがすっきりするから。

イ 相手から好意を持たれていることが分かった場合には、自分も相手に好意を持たなければならぬから。

ウ 相手から嫌われている場合には、真っ向から反対意見を述べることができるから。

エ 相手から嫌われていた方が、自分の印象管理がよりうまくいきやすく、結果的に相手から好かれることができるから。

オ 相手に好かれるよりも相手に嫌われた方が、余計な労力をかけたり、気配りをしたりしなくて済むから。

問七 ——— 線⑤「借りは返さなくてはならない」、——— 線⑥「貸

しは返してもらえないはず」とありますが、二つの感覚を表す語を本文中からそれぞれ五字以内で抜き出しなさい。

問八 ——— 線⑦「『質問と応答の組み合わせ』をたくさん蓄積する

ことが重要です」とありますが、それはなぜですか。その理由を三十五字以内で説明しなさい。

問九 本文の内容と一致するものを次のア～オより二つ選び、記号で

答えなさい。

ア 就職の面接のときに同調行動をとるのは時間の観点から簡単ではなく、また、たとえ同調行動をとれたとしてもその効果は限りなく薄い。

イ 印象管理のスキルを用いることで相手に自分が理知的であると思わせたり、感情的であるという印象を持たせたりすることができる。

ウ 相手を褒めるときには、自分から相手に直接伝えるよりも第三者を介して褒めた方が、褒めた内容の行き違いもなく、効果的である。

エ 返報性のテクニックを有効に使うには、普段周囲から信頼されている人を信じるよりも、普段周囲からあまり信頼されていない人を信頼するとよい。

オ プロローブのスキルを効果的に使うには、同じ形式で導入しつつ相手によって展開の仕方を適切に変化させていく必要がある。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校で美術の非常勤講師をしている「鹿野うる波」は、事故死した夫「鹿野くん」の幽霊と一緒に暮らしている。ある日、近所に住む「西島さん」から、小学四年生の仁礼家の息子の家庭教師の仕事を紹介される。ロボット工学を専門にしている父親が大学の研究室で試作品として開発したロボットだけが友だちという少年に会うため、「うる波」は、仁礼家を訪れることになった。

その週の終わり、西島さんが書いてくれた地図を頼りに、新たなアルバイト先になるかもしれない仁礼家を訪ねた。駅から十分ほどの住宅街の中、スクエア型のモダンな一軒家だった。淡い青色が涼しげなルリマツリが門に垂れ下がるように咲いている。

出迎えてくれた母親はおっとりした感じの人で、天才少年を生んだ教育ママのイメージからは程遠い。通されたりビングで、緊張しながら問題の二人に対面した。

「コンニチハ、秋デス」

「こんにちは、春です」

二人は無表情のまま、完璧に同じタイミングで頭を下げた。情緒が未発達と聞いて不安だったけれど、ちゃんと挨拶をしてくれたことに安堵した。表情はあまり豊かではなさそうだけれど、ふんわり張り出した紅色の頬は桃のように愛らしい。

「はじめまして、こんにちは。鹿野うる波です」

西島さんから「平等に兄弟扱いしないと息子さんが怒るのよ」と聞いていたので、まごつかずに二人に等分に視線と笑顔を注ぐことができた。「いい感じ?」

「ウン、イイ感じ」

二人、いや、ひとりとは一体は顔を見合わせ、小声で相談しはじめた。

「どんな人か、もう少し話してみないとわからないけどね」

「ウン。ジャア、モウ少し話シテミヨウカ」

「部屋に行く? それとも庭に出る?」

「ユックリ話ガデキルハウガイイ」

「じゃあ部屋だ」

器用に返事をするロボットを、私は驚愕の思いで見つめた。

会話ができるスマートフォンがあることも、人と話ができるロボットがいることもテレビで見て知っている。けれど二人の会話はそれよりも遥かにスムーズだ。

驚きが去ると、じわじわとかわいらしいという感情が沸いてきた。ロボットと聞いて想像していた、たとえば鉄骨が直撃しても壊れない昔のアニメ風超合金、もしくは部品やコードがむき出しになったメタルの塊といった外見とはまったく違う。

つるんとした白黒のツートンボディは五、六歳の子供くらいの大きさで、小さな頭にバランスよく手足がついている。指があるので細かい作業もできるのかもしれない。表情は作れないが、大きな黒い瞳は話すリズムに合わせて淡い光が点滅する。その様子が親しみやすく、機械とは思えない愛嬌のある印象になっている。

子供には余るサイズのソファで肩をくっつけ合い、小声で話す二人の姿に科学の進歩を見ながら、それがけっして受け入れがたい光景ではないことに胸を撫で下ろした。

「話だけじゃなくて、なにかしよう。絵を描くとか」

「イイネ。ソウシヨウ」

相談がまとまり、二人は隣に座る母親に言った。

①「お母さん、うる波さんと絵を描いてもいい？」

「今日は駄目よ。挨拶だけの予定で来ていただいてるから」

「大丈夫です。夕方くらいまでなら」

すみませんと母親に頭を下げられ、わたしはいいえと微笑んだ。②わ

たし自身が、この二人ともっと話してみたいという好奇心に駆られていた。

「うる波さん、ありがとう」

「アリガトウ」

春くと秋くんが、やはり同じタイミングで頭を下げた。

(中略)

翌週の水曜日、わたしは仁礼家を訪ねた。春くと秋くんに興味を持った鹿野くんがついていきたいとごねていたが、それは覗き見と同じですと断った。

春くと秋くんは今日も空色のソファに二人並んで腰かけ、黄色い熊のぬいぐるみを描いている。スケッチブックには相変わらずミミズののたくっている。

「うる波さん、質問していい？」

芯のやわらかい鉛筆を動かしながら春くんが言い、わたしはどうぞとうなずきつつ身構えた。先日の訪問で、この子たちの質問はレベルが高いとわかっている。

「ここに、A B C D E Fという六人がいます」

やっぱり美術とはまったく関係なさそうだった。

「A B C D Eの五人の命を助ける代わりに、Fの命を捧げよと言われたらどうする？」

「それはまた……難しい質問ね」

秋くと春くんはじつとこちらを見つめている。

「この質問に答えられた人はいるの？」

わたしは少し迂回してみた。

「いない。みんなうる波さんみたいに困ってた」

「ヒトリ、怒ッタ人モイタ」へ ア

「なんて？」

「子供ガソンナコトラ考エルナンテ不健全ダッテ」

それはまた最低の反応だとあきれてしまった。へ イ

「本当に悪いんだけど、その質問、わたしは答えられそうにない。状況も、経緯も、どんな人たちなのかもわからないんじゃないや答えの出しようがない」

「ああ、そうか。じゃあ状況はね——」

「あ、あ、ごめんなさい。状況や経緯がわかってても答えられません」

慌てて A 旗を振ると、春くと秋くんから「難しいこと聞いて

ごめんね」「ゴメンネ」と謝られてしまい、子供に気を遣わせた自分の

不甲斐なさに少し落ち込んだ。

「大丈夫。ウル波サンノ専門ハ美術ナンダカラ」

さらに慰められてしまい、もう苦笑いを浮かべるしかない。

「さっきの質問、二人はどう思うの？」

問うと、秋くんは即座に「一ヨリ五ガ多イ」と答えた。へうへ春くんを見ると、なぜか困ったように首をかしげていた。

「……僕は、まだ考え中」

へいへ

こんな自信なさげな春くんは初めてで、二人の意見が割れたのも初めてだった。

「それはまた難度の高い質問だ」

浴衣姿の人の波にもまれながら、鹿野くんがおかしそうに笑った。

今日は大きな花火大会を観に、電車に乗って隣町にやってきた。黄昏の薔薇色が山の端にわずかに残っているだけで、河川敷はじき夜に沈もうとしている。

「やっぱりそう思うわよね。でももっと驚いたのは、『どうしてそんな質問を思いついたの？』って聞いたら、『お父さんに聞かれたから』って返ってきたことよ」

「あ……、それはへヴィすぎる親子関係かも」

「いくら早熟の天才児といっても、小学四年生の息子にする質問なのかな」

「ABCDEの五人の命を助ける代わりにFの命を捧げよ、か」

へおへ

「捧げよって言われたらどうするか、よ」

「命の授業ってやつかな」

「学校で豚を飼って最後に食べるっていう授業がだいぶ前に話題になったよね」

「あったね。意義はあると思うけど、俺が生徒だったら単純に泣くと思う」

「わたしも」

「でも生姜焼きになって出てきたら、おいしく食べると思う」

「わたしも」

命の尊さを学ぶとき、人間は残酷であるという事実が必ずついてくる。けれど仁礼家のお父さんが春くんと秋くんに突きつけた問題は、それらとはまた違う。その質問にどんな意味があるんだろう。正しい答えなんてそもそもないと思うのだけれど。

「そこが③狙いなのかもしれない」

鹿野くんがいつの間にか現れた一番星を見上げて言った。すっかり日が暮れた河川敷には、白熱球を吊り下げた屋台がびっしりと軒を連ねている。色とりどりの浴衣を着た若い女の子たちで、近所の小さな縁日とは違う華やかさが満ちている。

「狙いつて？」

「人間には感情があるだろう。だから単純な数の論理で片づけられないことにも、ロボットなら迷わず答えを出す。機械は効率を最優先するものだし」

わたしは納得しかねる気持ちで、鹿野くんと同じ一番星を見上げた。

「工業機械なんかはそうだろうけど、人工知能って対人スキルみたいにデータを積み重ねて成長していくんでしょう。それでも効率が最優先なの？」

問うと、鹿野くんは自分の頭の中を整理するように眉を寄せた。

「ちよつと質問から逸れるけど、人間が人間である条件のひとつに無駄なことをするってのがあるんだよ。わかっててもそうできない非合理性。たとえば愛って感情とか」

すごくわかりやすく、身につまされるたえだった。

「じゃあ機械の条件が合理性にあるかと言うと、それはちよつと違う」

機械の条件は『正しく動く』こと。この正しくは善悪ではなく、製作者がプログラミングした通りに動くということであり、自動で動く掃除ロボットの先端にペンキのついた雑巾をぶら下げておけば、機械はプログラミング通り正しく部屋を掃除しながら、Bという非合理的な動きをする。

「つまり、ロボットの行動はすべて製作者の意図次第ってこと。だから最初にどういうプログラミングをされたかで、そのロボットの答えも変わる。もちろん人命を守るっていう基本的なプログラミングはされてるだろうけど、その先ね」

「春くんはわからないって答えて、秋くんは数を優先したわ」

「じゃあ、その子は C を優先するようプログラミングされたんだよ。一より五だ」

「え？」

「誤解しないで。冷酷っていうんじゃないで、いざというとき、より多くの人命を優先するっていうのはレスキューの基本だから。災害が起きたとき、怪我の具合で患者の治療優先度を選別するトリアージと似たようなものというか」

「え、でも、それだとおかしくない？」

「うん、人道的な考えとはまた別だよ」

そういうことじゃなくて——という前に鹿野くんが言葉を続ける。

「機械はプログラミングに沿って答えを出すけど、人間は延々と迷い続ける。悩むこと自体が機械と人間の違いを証明する。つまり自分たちは根本のところ違う、別の種族だって息子に理解させること。お父さんの意図はそこにあるんじゃない？」

違和感がどんどんふくらんでいく。

鹿野くんはなにか勘違いをしているんじゃないだろうか。

「でも、そこまでして二人を離す必要があるのかな。うる波ちゃんから聞かす限り、春くんの情緒面にそこまで深刻な問題はない気がするんだけど」

「え？」

問い返したとき、周りでお祭りとは異なるざわめきが生まれた。

「ちよつと見て見てー、あれ、ロボット？」

「浴衣着てる。かわいい。すごい、二本足で歩いてる」

周りの視線を追うと、春くんと秋くんの姿が目に入った。後ろにお父さんとお母さんの姿も見える。二人はお揃いの浴衣そろを着ていた。

「まさか、春秋コンビ？」

鹿野くんに問われ、うなずいた。

「おーい、秋くん、春くん」

いきなり鹿野くんが二人に向かって大きく手を振った。一瞬焦ったが、わたし以外には鹿野くんの声も聞こえないし姿も見えないのだった。鹿野くんもわかつているだろうに、よっぽど二人に興味があるようだ。仕方ないので、わたしが二人に声をかけた。

「秋くん、春くん」

すると二人がこちらを向いた。うる波さんと手を振ってくれる。秋くんはかき氷を作ってもらっている最中で、春くんだけが先にこちらにやってきた。

「うる波さん、こんばんは」

礼儀正しく挨拶をする春くんを、鹿野くんが興味深そうにしげしげと見ている。

「こんばんは。二人ともお揃いの浴衣なのね。すごく恰好いい」

「久しぶりの家族みなでお出かけだからって、お母さんが着せてくれたんだよ。こんな近くで花火を見るのは初めてだから、すごく楽しみ」

「この花火大会はフィナーレがすごいのよ」

夜空一面が光で埋め尽くされる光景が圧巻なのだ。

「うる波さんはひとりできたの？」

春くんがわたしの周りを見回す。

「僕たちと一緒に見る？」

優しい春くんに、わたしは目を細めた。

「ありがとう。でも大丈夫よ。ひとりじゃないから」

そのとき、^④ぽんつとポップコーンが破裂するような軽い音が響いた。

なんだろうと見ると、山盛りのかき氷をこぼさないよう、そろそろこちらに歩いてくる秋くんの背後、ずらりと並ぶ屋台のあたりで、小さな火花のようなものが上がっていた。

なにかのアトラクションだろうか。首をかしげたと同時だった。

春くんがいきなり秋くんのほうへと駆け出した。

少し遅れて、大きな爆発音が響いた。一瞬の出来事だった。大きな炎の塊が生まれ、そこから飛び散った火花が目の前をかすめていく。思わず目を閉じ、開けたときにはあちこちに人が倒れ、座り込み、泣き声や悲鳴が上がっていた。

「……な、なに？」

「わからない。とにかく離れて」

^{ぼうぜん}茫然とするわたしに鹿野くんが声をかける。

「秋仁！ 秋仁！」

あちこちで上がる悲鳴に混じって、その声が聞こえた。地面に倒れている秋くんをお母さんが抱き起こしている。水色の浴衣のあちこちが激しく焦げている。

「……あっちが秋くん？」

鹿野くんの驚いた顔に、^⑤さっきからの違和感がはっきりした。

(^{なまら}風良ゆう『神様のピオトープ』より)

問一 ―― 線①「お母さん、うる波さんと絵を描いてもいい？」と

ありますが、二人が「うる波」に好感を持ったのはなぜですか。

その理由を説明した次の文の [] に入る言葉を本文中より二十字で抜き出さない。

うる波が [] から。

うる波が [] から。

問二 ―― 線②「わたし自身が、この二人ともと話してみたいという好奇心に駆られていた」とありますが、「わたし」がこのように思った理由を説明した文として最も適当なものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア スムーズに人と会話することのできるロボットに驚き、ロボットの進化の状況を知りたいと思ったため。

イ 挨拶をすることができた少年を見て、家庭教師として関わられるかどうか話してみる必要があると思ったため。

ウ 二人のやり取りに不自然さがないことに驚きつつも、二人の礼儀正しく愛らしい様子に好意を持ったため。

エ 同じ言葉を繰り返すように話す二人の様子から、少年自身ができるように考えているのか聞きたいと思ったため。

オ 少年の大きな黒い瞳が親しみやすく、ロボットと小声で話す様子にも不自然さがなく安心したため。

問三 次の一文は、本文の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」のどこに入りますか。ア～オの記号で答えなさい。

人数が多いほうを助けるということか。

人数が多いほうを助けるということか。

問四 [A] に入る適当な言葉を、漢字一字で答えなさい。

問五 ―― 線③「狙い」とありますが、「鹿野くん」は仁礼家のお父さんの「狙い」はどのようなことだと考えていますか。本文中より三十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

父さんの「狙い」はどのようなことだと考えていますか。本文中より三十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問六 [B] に入る文脈に即した言葉を、五字以内で答えなさい。

問七 [C] に入る言葉として最も適当なものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 無駄 イ 感情 ウ 善悪

エ 効率 オ 条件

問八 ―― 線④「ぼんつとポップコーンが破裂するような軽い音が響いた」とありますが、使われている表現技法として適当なものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 体言止め ウ 倒置法

エ 対句法 オ 直喩法

問九

—— 線⑤ 「さつきからの違和感がはつきりした」について答えなさい。

i

この部分を説明した次の文の

 ・

 に入る言葉をそれぞれ答えなさい。

鹿野くんは「二ヨリ五ガ多イ」と答えた

 くんが

だと思っていたということ。

ii

「うる波」の感じていた「違和感」とはどのようなことか。
四十字以内で説明しなさい。